

沖縄短歌の現状と課題 屋良健一郎

昨年「短歌往来」八月号（沖縄特集）をもとに沖縄詠を考えた研究会「沖縄短歌の現状と課題」が、三月十六日に那覇で開かれた。紙幅の関係で詳述できないが、会の内容は三月二十日の「琉球新報」、同月二十七日・二十八日の「沖縄タイムス」が報じた。

会では拳がらなかったが、「短歌往来」で気になったのは（基地撤去と抗議すれども我が物にファントムオスブレイ夜も飛び交う）（大城永信）、（オキナワの空を我が物顔にオスブレイ悠久の歴史に汚点を塗るか）（運天政徳）、（葬送の誂経打ち消すオスブレイ彼岸此岸を我がもの顔に）（照屋敏子）、（オスブレイの我が物顔に訓練する伊江島は無入島にあらず）（宮城鶴子）、（嘉手納基地・普天間・伊江島オスブレイわが物顔にパラシュート降下）（伊波邦枝）といった歌だ。いずれにも「オスブレイ」と「我が物（顔）」の組合せが見られる。照屋作は「彼岸此岸」への着目で辛うじて個性を保つが、他の四首はほぼ同じような発想と言っている。地元新聞ではオスブレイの飛行を「我が物顔」と形容するのがパターン化している（「沖縄タイムス」二〇一二年十月七日、二〇一三年二月八日など）。これらの歌の言葉はそのような報道から来ているのではないか。現場でしか感じられないことを、現場で生まれた自分の言葉で伝えるという点が、基地詠では弱いように思う。

関連して、沖縄の作者の歌は漠然と「基地」や「オスブレイ」

を詠むのに留まってしまいがちだ。作者はこの基地を見ているのか、どこでオスブレイを見ているのか。基地や周辺の街の様子は、それぞれ違う（無論、似てはいるが）。観念的な歌ではなく、現場ならではの丁寧な描写が必要だ。決して右に挙げた五首だけを言っているのではない。これらの点は、私のような若手から選者クラスのベテランまで、ほとんどの沖縄歌人に共通する課題だ。誤解を恐れずに言うと、現場であるはずの沖縄で生まれる歌に「現場性」が乏しいことが少なくない。同じ「短歌往来」掲載の文章「歌の弱さと強さ」で小高賢は、「報道でしか感じていない読み手の身体にとどくような詠み方が欲しい」「オスブレイ」がどこか肉体化されていない」と沖縄歌人の作品を評した。卓見だと思う。

会では「沖縄をどんどん発信すべき」という趣旨の発言もあり、大きな拍手が起きた。沖縄を発信することは大事だ。しかし、小高評論のような外からの声に対し、単に「（今のまま）発信し続ける」ことを選ぶ、あるいは大きな拍手で賛同を示すことは、一歩間違えば「沖縄／沖縄を理解できない本土」という単純な構図を生み出す危険性がある点にも留意しなくてはならない。なぜ基地詠に名歌が無いのか、中央に届かないのか。外に発信するだけではなく、立ち止まり、内（現場）で考えることが大切だ。

研究会は當間實光（未来）が提案し、名嘉真恵美子（かりん）と私が賛同して実施された。「短歌往来」の特集、特に小高賢の評論への県内の反響がきっかけだ。会が成功したかどうかは別として、各グループが個別に活動していた沖縄で、初めての超結社の集いという一歩を踏み出すことができた。歌人達を動かすきっかけとなった小高氏に敬意と感謝、そして哀悼の意を表したい。